

## 私の研究とその社会的意義

グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士前期課程

B0667014 飛内悠子

### 本論要旨

本論文は、筆者の研究がどのような社会的意義を持つものなのかを論じたものである。はじめに本論の概要を述べた後、1で筆者の研究についての概要を述べる。まず問題の所在と研究目的として、筆者の現在の研究テーマについて概要を述べた。次にスーダン共和国において現在進行中のアラビア語化という言語状況についての文献の批判的分析から、国内避難民地区で実際に言語状況を参与観察によって見る必要性を論じ、国内避難民の言語状況を教会活動との相互関連という視点から見るという研究目的を述べている。

これを踏まえて実際の研究内容について次章で論じた。スーダンの言語史を論じた後に、筆者の研究対象地域であるハルツーム、および調査対象エスニック・グループである Kuku 人の出身地の南部の言語状況について簡単に記述した。これを踏まえてフィールド・ワークによって得られた調査結果を論じている。

その後簡単に本論における社会の定義を行った後、アカデミズム、日本社会、スーダン社会という筆者の研究が直接関係があると考えられる社会にたいして、筆者の研究がどのような意義を持つのかということについてそれぞれの社会ごとに分けて論じた。アカデミズムの所では、国内避難民に関する研究と、スーダンの言語に関する研究において筆者の研究が果たす意味を述べ、日本社会における意義の所では国際支援の際の情報提供とスーダンへの関心提起を意義とした。スーダン社会に関しては、スーダン全体と、Kuku 社会に対してに分けた。スーダン全体に対しては筆者の研究はその言語政策を考える際に有効であるとし、Kuku 社会に対してはこれまで述べてきた全ての意義が Kuku の人々に還元することを述べる共に、筆者自身が Kuku の人々に関して見聞きしたことを描くことを意義とした。

最後に今後の筆者の研究についての展望とその意義を述べて結論としている。

## 0. はじめに

本論文は、筆者である飛内悠子の研究がどのような社会的意義を持つものかについて論じるものである。筆者は2006年大学院入学後、スーダン<sup>1</sup>の言語問題を研究してきた。この研究成果をどのように社会に活かすのか、ということについて論じていきたい。

論文の概要は、1で筆者の研究についての概要を述べ、2でその社会的意義について述べる。これを踏まえ、最後に筆者のこれからの研究とその未来について論じている。

### 1. 筆者の研究について

#### 1-1. 問題の所在と研究目的

筆者の現在、スーダン共和国の首都ハルツーム郊外にある国内避難民集住地区に住むKuku人の言語状況を、彼らが中心となつてたて、運営する聖公会の教会の活動との相互関連という視点から分析し、彼らの言語状況がどのように形成されているのかということについて研究している。この分析を通して国内避難民と言われる人々の現在を描きだすことを目的にしている。

スーダン共和国は、2005年まで南北間で内戦があった国である。その戦争の内情は複雑なものであり、一言では言い切れないが、大体においてはアラブ・イスラーム文化を旗印にした北部と、キリスト教を旗印にした南部との戦いであった<sup>2</sup>。この内戦は、戦場となった南部の人々を難民、もしくは国内避難民として故郷から追いやった。そして長期間の避難生活は人々の生活や文化に変化を及ぼしている。内戦終了後、避難民の故郷への帰還が始まっている。帰還、そして帰還後の問題は山積みだ。長い避難生活によって変化した避難民の生活、文化は、時として故郷のそれと相容れない場合が多いからである。これを解決していくためには、避難民の避難生活を理解することが不可欠である。そのための1つの切り口として筆者は言語に注目した。

スーダン共和国は100以上の言語が存在する多言語国家である。[Lesch 1998: 16-7] 大まかに言えば北部スーダン<sup>3</sup>はアラブ人がマジョリティのアラビア語を主要言語にする地域であり、南部は各エスニック言語が話されている地域である。だが、歴史、社会的要因によってスーダン共和国内の80%以上の人は何らかの形でアラビア語を話す。[Al-Amin 2007a: 2] そのアラビア語は地域によって語彙や文法に違いがある。スーダン共和国内において、非アラビア語を第一言語とする住民の第一言語が何らかの種類のアラビア語へと変化して

<sup>1</sup>本論にはスーダンを指す呼称が2種類ある。スーダンとは南北含めたイギリス・エジプト共同統治時代に完成した現在のスーダン共和国の領土を指す。スーダン共和国、としたときには共和国政府がその主体である。

<sup>2</sup> 参考 [Johnson 2003、栗本 1996, 2005]

<sup>3</sup>本論全編で北部、南部スーダンという言葉が多用することになる。本論では便宜上北部をエジプト国境からコステイまで、南部をコステイからウガンダ、ケニア国境までとする。だが、この地理的分別によって人々をきっちり分けることが出来ないのは当然である。近年スーダン研究者はこの北部、南部という言葉を使うことが、複雑なエスニック構成を持ち、決して単純化できない北部、南部を一枚岩として見てしまうことにつながる危険性があることを指摘している。しかし、スーダンの歴史や政治を考えると時に北部、南部という見方を採らざるを得ない場合もある。また「この図式が単純で常識的な見解に訴えやすいがゆえに、多くのスーダン人自身の認識枠組みになっている」[栗本 1996: 35] と言う声もある。このような理由により、私は北部スーダン、南部スーダンの概念を本論中で使用している。

いくことを「アラビア語化」という。特にアラビア語ハルツーム方言が主要言語である首都ハルツームに住む避難民の間でその傾向がある。ハルツームには20年以上続いた内戦の影響で現在180万人以上の避難民が住む<sup>4</sup>。

国内避難民のアラビア語化を論じた文献は、避難民のアラビア語への言語変化を示す一方、子どもに学ばせたい言語にエスニック言語を選ぶといった言語意識と言語変化の現状との相違も示している。その一方、避難民が「アラビア語化」へ至る過程や、避難民自身の言語活動には言及していない。だが言語変化へ至る過程には、必ず人々の言語意識や主体的な言語への働きかけがあるはずである。先行文献にはこのことへの言及がない。

このような問題意識から、筆者はこれを参与観察によって見ることで、避難民たちがどのように自身の言語生活を作ってきたのかを理解しようと考えた。この考察を通して、国内避難民の避難生活の一面を知ることが出来ると考えたためである。そこでスーダン共和国首都ハルツームの国内避難民地区の一つであるソーバにおいて、南部スーダンからの避難民である Kuku 人を対象に参与観察を行った。筆者は今回のフィールド・ワークで特に Kuku 人と彼らが中心となって立て、運営するセント・ジョセフ教会の活動と Kuku 人の言語使用状況との関わりについて調査を行った。

## 1-2. 研究概要

筆者の研究方法は主に2つである。一つはスーダンの言語、内戦、国内避難民、エスニック・グループに関する文献研究であり、多くは2次資料を用いて調査した。もう一つは2007年9月から2008年3月までの半年間行ったスーダン共和国ハルツームにおけるフィールド・ワークである。

筆者がインフォーマントとしている Kuku 人は南部出身であり、その言語状況には多分に南部の言語政策史、言語状況が関わる。そのためまず、文献によって南部を中心とした言語政策の歴史と、スーダン共和国内、特にインフォーマントが住むハルツームと出身地である南部の言語状況について研究した。

スーダンの言語政策には、植民地時代のイギリスの政策が強く影響している。1898年以降スーダンを植民地としたイギリスが植民地経営の一貫として行った南部分離政策の影響を受け、北部と南部の社会文化の溝が深まった。独立後支配権を握った北部による南部へのアラブ・イスラーム化強要に南部人は反発をしたものの、その影響は南部へのジュバ・アラビア語といわれる南部特有のアラビア語の広がりにも現れた。今でも南部人の北部への不信は根強い<sup>5</sup>。

このような歴史を背景として、現在の言語状況を見てみよう。現在ハルツームの主要言語はアラビア語ハルツーム方言である。新聞はアラビア語と英語のものがあり、読者層ははっきり分かれている。テレビは主要放送局のものはほとんど標準アラビア語で放送される。

<sup>4</sup> 参考 [Al-amin 1992, Mugadam 2002]

<sup>5</sup> 参考 [Ushari 1983, Holt & Daly 2000, Mugadam 2002]

だが、現在ハルツームには衛星放送が普及しており英語の番組も見ることが出来る。

それに対して南部は 60 以上のエスニック言語が存在する多言語地域であるが、前述した歴史社会的要因によりジュバ・アラビア語が共通語として広がっている。北部政府の意向により 1990 年代以降アラビア語による教育が行われていたが、南部の抵抗軍である Sudan People's Liberation Army/Movement (SPLA/M) の支配地域では英語による授業が行なわれていた。[Kevlian 2007: 527] 2005 年の CPA 締結以降、南部の教育言語は英語に決定され、2006 年からその施行が始まっている<sup>6</sup>。

上記のような言語に関する研究の後、筆者はスーダンの国内避難民についての文献調査を行った。スーダンには現在国内避難民が約 450 万人おり、これは世界最大規模である<sup>7</sup>。ほとんどが内戦か自然災害によって、故郷を終われた人々である。出身地域、エスニック・グループは様々であるが、近年西部ダルフルでの紛争の激化によってダルフル出身者が増えている。その内ハルツームには約 180 万人がおり、避難民たちはハルツームの郊外に集住している<sup>8</sup>。

次に筆者はその国内避難民の集住地区の 1 つであるソーバ地区においてフィールド・ワークを行った。主なインフォーマントは南部スーダン、ウガンダとの国境に近いカジョケジという街を出身地とする Kuku 人である。Kuku 人はバリ人のサブ・エスニック・グループの 1 つであり、年齢組を基本的な社会システムとする農耕民である。Kuku 人のエスニック言語はバリ語であり、壮年層はジュバ・アラビア語も話す。イギリス植民地時代にカジョケジに入った宣教師団の影響を受け<sup>9</sup>、90%以上が聖公会の信徒である。ソーバに住む Kuku 人の多くは 1987 年、第 2 次内戦によって故郷カジョケジが行政機能を失ったことをきっかけにハルツームに来た。現在ソーバには 500 人ほどが住んでいる<sup>10</sup>。

ソーバの Kuku 人たちは 1994 年から自ら教会を立て、そこで様々な活動を行なっている。セント・ジョセフ教会と呼ばれるその教会は、ソーバで唯一バリ語による礼拝を行なう、Kuku 人にとって社会の中心的存在である。

他の避難民同様、Kuku 人の間でも「アラビア語化」は進んでいる。特に若年層でその傾向がある。だがその一方、彼らは自らをアフリカンであると自称する。事実アラビア語は Kuku 人の間でコミュニケーションの道具として定着しているが、壮年層の Kuku 人同士の会話はバリ語で行われ、若年層へのバリ語の継承も行われている。このような彼らの言語状況形成の一つの要因となっているのがセント・ジョセフ教会である。

Kuku 人はセント・ジョセフ教会で実に様々な活動を行っている。この活動は Kuku の人々の共同体コミュニケーションのツールとなっている。ここでの礼拝や活動の際の使用言語は主にバリ語である。セント・ジョセフ教会はソーバで唯一バリ語で礼拝をする教会なの

<sup>6</sup> 参考 [Kevlian 2007]

<sup>7</sup> 国内避難民の数的データに関しては全て iDMC の HP 参照。

<sup>8</sup> 参考 [Eltigani 1995]、iDMC の HP

<sup>9</sup> スーダンの聖公会史については [Kayanga & Wheeler 1999] が詳しい。

<sup>10</sup> ソーバの Kuku 人に関しては筆者のフィールド・ワークのデータからすべて引用。

である。この教会の活動を通して Kuku 人は Kuku アイデンティティを再認識し、バリ語への良好な言語意識を形成していく。また、この言語意識は Kuku アイデンティティを強化し、失われかけた道具としてのバリ語の再興、という動きにも繋がっていく。教会は確実に Kuku 人の言語状況形成の要因の一端を担っている。

筆者はこの調査結果を Kuku の人々の言語状況を巡る記述とその解釈として論じた。さらにこの解釈から、避難民たちが避難生活の中で自分たちの社会を創ってきた過程が見えてきた。

筆者はこの研究成果を修士論文『スーダン共和国ハルツームにおける国内避難民の言語状況形成過程: 聖公会の教会の活動との関わりから』とし、2009 年に上智大学に提出予定である。今後さらに研究を進め、フィールド・ワークによって見えてきた教会以外の言語状況形成要因を調査し、国内避難民の現在を言語を通じて見て行きたいと考えている。

## 2. 私の研究の社会的意義

### 2-1. 誰にとっての意義なのか? : 本論における「社会」の定義

1 で述べてきた筆者の研究が社会にどのように生かされうるのか、という問題を考える前提として、本論における社会とは何かということ定義しておきたい。

まず、社会と言う単語を英語の Society の訳語であると規定しよう。Society-社会という単語は、広く人口に膾炙し、社会学においては中心的概念でもある。だが、この単語は使う人により少しずつその意味あいが変わる。「国民国家」がその概念の根底にあることもあれば、文化がある場合もある。[アーリ 2006: 1-36]「社会」についての筆者の研究の意義を考えるためにはどのような「社会」なのかを規定する必要があるだろう。

そこで本論では社会を社会人類学者中根千枝の定義に従い、「共通の組織に組み入れられている人々の集団」[中根 1987: 46] であるとする。人間は常に複数の集団に所属する。当然、関わる社会も複数存在すると言うことができるだろう。では、筆者の研究に関わる社会とは何か。筆者は大きく分けて三つの社会があると考え。一つは、アカデミズム、つまり学問社会、筆者が所属する日本社会、そして筆者のフィールドであるスーダン社会である。スーダン社会にはスーダン共和国と筆者の調査対象である Kuku 人の社会の 2 種類があるがこの二つは必ずしも峻別できるわけではない。

それではこの三つの社会にとっての筆者の研究の意義を考えて行きたい。

### 2-2. アカデミズムにとっての意義

筆者の研究はアカデミズムにとって、さらに限定すれば国内避難民に関する研究とスーダンの言語に関する研究にとって以下のような意義がある。

まず、これまで国内避難民の言語変化を巡る研究にはフィールド・ワークによる質的研究は存在しなかった。筆者の研究は、そこに今までの量的調査では成しえなかった新しいデータを提供した。そしてこのデータの解釈によって、国内避難民と呼ばれる人々が「避

難」という運命に流されるだけではなく、常に今を主体的に選択する存在でもあり、その相互作用によって彼らの生活は作られていくという視点を国内避難民の研究に提供した。

### 2-3. 日本社会にとっての意義

それでは、筆者が生まれ育った日本社会にとって、筆者の研究はどのような意味があるのだろうか。それは大きく分けて 2 つあると考えられる。一つは日本の国際協力分野への有益な情報の提供である。2005 年に包括的和平協定が締結されたことによって内戦が終了したスーダンに対して世界は大規模な支援を表明した<sup>11</sup>。日本もスーダンに対して支援を行うことを決定し、すでに JICA はハルツームと南部の中心都市であるジュバに事務所を開設し支援事業を始めている。また、日本の NGO も次々とスーダンで支援事業を始めている。支援地にとって適切な支援のあり方を探るにはその土地の情報が欠かせない。だが、これまでスーダンと日本は地理的、歴史的条件から関わりが薄く、情報が少ない。その上これから支援を必要としている難民や国内避難民に関する数的調査はあっても、人類学的研究は数えるほどしかない<sup>12</sup>。本研究はそこに現在の国内避難民の状況という、貴重な情報を提供しうる。このことによって日本社会とスーダンの良好な関係構築に貢献することが出来るだろう。

もう一つの意義は、筆者が自分の研究を日本にいる周りの人に紹介することで、紹介された人がスーダンという国、もしくは地域、そしてそこに暮らす人々に思いをはせることにつながるということにある。これは厳密には研究の意義とは言えないのかもしれない。しかし、筆者がスーダンを、Kuku の人々のことを話すことによって、話された人が新聞の小さな記事に目を留める、もしくはふと地球儀でスーダンの場所を確認するというように、スーダンに関心を寄せるようになることは確実にある。その小さな関心を作り出すことの意義は大きいと筆者は考える。

### 2-4. フィールドにとっての意義

それでは、筆者の研究は研究の当該社会の人々にとってどのような意義があるのか。これについてはスーダン、Kuku という 2 つの社会に分けて考えたい。前述したようにこの 2 つは峻別しうるものではないが、全く同じであるとは言えない。スーダン社会の中に Kuku 社会があるとも考えられるが、本研究の意義はスーダン社会を対象とした場合と Kuku 社会を対象とした場合において少々異なる。そのためこの 2 つを分けて論じたい。

#### ・スーダンにとって

スーダンにとって、本論はその言語政策を考える上で有効である。スーダン共和国には独立以前より言語問題が存在していた。歴史、社会的背景からアラビア語諸方言、そして英語、各エスニック言語間の社会的地位に差が生じていたという事情が言語問題の背景に

<sup>11</sup>参考、外務省 HP [http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/africa/oslo\\_gh.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/africa/oslo_gh.html)

<sup>12</sup> 例として [栗本 1996, 2007, Bützer 2007, James 2007]

あった。現在内戦を終えたスーダンでは南北で公用語がわかれている。北部は従来どおりアラビア語、そして南部の公用語は英語になった。だが、北部には依然として南部からの避難民が存在し、内戦終了後も必ずしも帰還を望む人ばかりではない。また、南部の現在の共通語はジュバ・アラビア語である<sup>13</sup>。英語を公用語とすることによって、教育を受けた一部のエリートを優遇することにつながる可能性がないとは言えまい。エスニック言語話者を切り捨てることにつながる可能性もある。さらにはこれから帰還する避難民たちはハルツームでアラビア語ハルツーム方言、もしくはエスニック言語を第一言語としている人が多い。これから生じる可能性のある言語政策の問題を考える上で、国内避難民の言語の現状を描く筆者の研究は有益な情報源となるだろう。もちろん筆者はスーダン共和国の言語政策に介入する気は毛頭ない。だが、筆者の研究を世に問うことによって、スーダン共和国で生きる人々が彼ら自身にとってよりよい言語政策のあり方を考える一助となることは可能であると考えている。

#### ・ Kuku の人々にとって

Kuku の人々にとって、筆者の研究の意義はなんであろうか。筆者には、ある Kuku 人の言葉しか思いつかない。筆者が深く関わることになったセント・ジョセフ教会のクリスマス礼拝に参加したときに言われた、「私たちは 28 年間、こうやってクリスマスを過ごしてきたのよ。このクリスマスを書いてね。」という言葉である。

日本社会にとっての意義で論じた支援者への情報提供、スーダンにとっての意義である言語政策を考える上での有効な情報、という筆者の研究の意義ももちろん、最終的には Kuku の人々へ還元されていくものであると筆者は考えているし、そうあって欲しいとも願う。しかしやっぱり、直接 Kuku の人々に対して筆者の研究が成しえることはおそらく、筆者が見て、それを描く、そして他の人々に伝えるということなのだろう。

### 3. 結語：今後の研究とその社会的意義

筆者は今回のフィールド・ワークにおいて浮上した教会活動以外の Kuku 人の言語状況形成要因を今後追調査するつもりである。また、ハルツームに住む Kuku 人だけではなく、カジョケジ在住、そしてウガンダに住む Kuku 人の言語状況についても調査したい。このように調査を重ね、Kuku というエスニック・グループの人々が、混迷を極めた時代の中で言語状況をどのように作ってきたのかを言語民族誌として描きだしたいと考えている。

これは、避難という移動、都市化、グローバル化と人間の言語状況との関係の理解の一助となることを目指す研究である。ある社会において、言語には社会的地位が備わる。それは人々の言語状況に、ひいては人生に多大な影響を及ぼす。その社会的地位はこれまでの歴史や社会状況との相互作用の中で作られていくものだ。その相互作用のあり方を徹視的に見ていくことを筆者は生涯の研究テーマとしている。この研究は、これまで筆者が述べてきた筆者の研究に直接関わる社会だけではなく、様々な社会において言語政策を考え

<sup>13</sup> 参考 [栗本 2002b]

る際に、言語の社会的地位と人々の関係のあり方への配慮といった形で生かされる可能性は十分あると筆者は考える。

これまで筆者の研究が社会にとってどのような意義があるのかを論じてきた。その一方で筆者は自分の研究がある意味自分のためのものであるという自覚もある。

筆者は大学学部時代に行った、カンボジアでのフィールド・ワークの経験から言語の社会的地位と人間の行動様式との関係に興味を持ち続けている。筆者の現在の研究は、この筆者の研究関心に添うものでもある。また、筆者が描いたスーダン、そして Kuku の人々が必ずしもその全てではない。民族誌はあくまでその社会の、人々の一面を伝えるにすぎない<sup>14</sup>。そのことに常に留意しながらも、許される限り Kuku の人々を描いていきたいと願っている。

#### 参考文献

##### ・邦文

- アーリ, J. 2006. 『社会を越える社会学: 移動、環境、シチズンシップ』吉原直樹監訳、法政大学出版会.
- エマーソン, R. R. & フレッツ, L. ショウ, 1998. 『方法としてのフィールドノート: 現地取材から物語作成まで』佐藤郁哉他訳、新曜社.
- 栗本英世. 1996. 『民族紛争を生きる人々: 現代アフリカの国家とマイノリティー』世界思想社.
- . 2000. 「継続する内戦と成果のない和平調停: スーダン内戦をめぐるさまざまなアクター」武内進一(編)『現代アフリカの紛争: 歴史と主体』アジア経済研究所.
- . 2002a. 「英語・アラビア語・ジュバ・アラビア語: スーダンにおける言語、教育、政治、アイデンティティー」宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動』人文書院.
- . 2002b. 「難民キャンプという場: カクマ・キャンプ調査報告」アフリカレポート 35、34-38.
- . 2005. 「スーダン内戦の終結と戦後復興」海外事情 53-4、2-21.
- . 2006. 「戦後スーダンの政治的動態」海外事情 54-4、77-92.
- . 2008. 「教育に託した開発・発展への夢: 内戦、離散とスーダンのパリ人」石塚道子他(編)『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院.
- 中根千枝. 1987. 『社会人類学: アジア諸社会の考察』東京大学出版会.

---

14 「フィールドノーツや最終的に出来上がってくる民族誌はどうしてもまたいかなる場合であっても、エスノグラファーのパーソナリティ、経験、視点、そして理論的な立場のフィルターを通して構成されていくものだ。」[エマーソン、フレッツ&ショウ: 1998: 441] これは決してその構成されて出来あがったものに対する非難ではない。この認識が何かを書く者にとって必要であるということである。さらに言えばこのフィルターを通して構成されたものから何を言うのか、と言うことが問われているとも言える。

・ 欧文、アラビア語文

- Al-Amin Abū Manqa Muḥammad & Yūsuf al-Ḥalifa Abūbakr. 2006. *Audā' al-Luġat fī al-Sūdān, al-Khar>um*: Jāmi't al-Khar>um.
- Al-Amin, A. 2007a. *Linguistic Diversity and Language Endangerment in The Sudan*, Unpublished.
- . 2007b. *The 'Indigenous Language' in The Current Post-Civil War Interim Constitution of The Sudan: The Politival and The Practical*, Unpublished. Paper of 10<sup>th</sup> Nilo-Saharan Linguistics Colloquium 22-24 August 2007-Paris.
- Bützer, C. 2007. *The Long Way Home: Contemplations of Southern Sudanese Refugees in Uganda*, Berlin: Lit Verlag.
- Eltigani, E. E. 1995. *War and Drought in Sudan: Essays on Population Displacement*, Florida: The University of Florida.
- Holt, P. M. & M. W. Daly. 2000. *A History of Sudan: From the Coming of Islam to the Present Day*, London: Pearson Education.
- James, W. 2007. *War and Survival in Sudan's Frontierlands: Voices from the Blue Nile*. Oxford: Oxford University Press.
- Johnson, D. H. 2003. *The Root Causes of Sudan's Civil Wars*, Bloomington: Indiana University Press.
- Kayanga, S. E & A. C. Wheeler (eds.) 1999. *But God is Not Defeated!: Celebrating the Centenary of the Episcopal Church of the Sudan 1899-1999*, Nairobi: Paulines Publications Africa.
- Kevlian, R. 2007. "Beyond Creole Nationalism?: Language Politics, Education, and Challenge of State Building in Post-Conflict Southern Sudan", *Ethnopolitics* 6-4, 513-543.
- Lesch, A. M. 1998. *The Sudan: Contested National Identities*, Bloomington: Indiana University Press.
- Miller, C. & Al-Amin, A-M. 1992. *Language Change and National Integration: Rural Migrants in Khartoum*. Khartoum: Khartoum University Press.
- Mugadam, A. R. H. 2002. *Language Maintenance and Shift in Sudan: The Case of Ethnic Minority Groups in Greater Khartoum*. Khartoum: Thesis: University of Khartoum.
- Okazaki, A. "The Making and Unmaking of Consciousness: Two Strategies for Survival in a Sudanese Borderland", in R. Werner (eds.) 2002. *Postcolonial Subjectivities in Africa*, London: Zed Books.
- Ushari, A. M. 1983. *Arabic in Southern Sudan: History and Spread of a Pidgin-Creole*, Khartoum: FAL Advertising and Printing Co. Ltd.

・ HP

Internal Displacement Monitoring Centre (IDMC) HP

[http://www.internal-displacement.org/idmc/website/countries.nsf/\(httpEnvelopes\)/577775822F0F](http://www.internal-displacement.org/idmc/website/countries.nsf/(httpEnvelopes)/577775822F0F)

27B802570B8005AAC84?OpenDocument (最終閲覧日 2008.10.12)

外務省 HP

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/africa/oslo\\_gh.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/africa/oslo_gh.html) (最終閲覧日 2008.10.12)